

晴れた日には出かけよう！
～まちのミリョクを再発見!!～

19

みょうけん

妙見さまの神獣



日の出町の里山には絶滅が心配されているトウキョウサンショウウオが暮らしています。

日の出町の『トウキョウサンショウウオ』は、昭和53年(1978)に町の天然記念物に指定されました。また現在、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧種とされています。



トウキョウサンショウウオ

トウキョウサンショウウオは、両生類サンショウウオ科に属する夜行性の動物で、体は茶褐色、成体は体長が10cmほどになります。卵は4月頃に流れが緩やかな沢などに産み付けられ、その春のうちに孵化します。幼生は水中で生活し、ウーパールーパーの様に体外に小さなヒゲ状のエラがあります。食欲は旺盛で、生物で口に入るものなら何でも食べ、時には共食いもします。8～9月頃には幼体となり、陸上へ生活の場を移しますが、気候等で幼生のまま翌年の夏まで過ごすこともあるようです。幼体は森の落ち葉の下など湿った場所で生活し、数年かけて成体になります。成体の生存率は高く、土の中で越冬し10年以上も生きる個体もいるそうです。

昔は町内随所で、あの独特な三日月状の卵を見かけたものですが、心無い人による乱獲や、野生化したアライグマが卵を食べてしまう事などが原因して固体数が減少し、生息域も狭まっているようです。日の出町では文化財保護条例により捕獲を禁止しています。町内に生息するトウキョウサンショウウオを勝手に捕獲すると罰せられる場合もあります。

平井の妙見山の麓を流れる妙見沢(小熊沢)に住むサンショウウオには、妙見様にまつわる伝説があります。妙見沢のサンショウウオは、妙見様の御神獣である種陀(玄武)の化身の一部と伝えられています。種陀とはカメとヘビが一体となった神獣で、カメは背に妙見様を乗せ、ヘビは妙見様の体を支え、水上を渡り地上を走り、ヘビが竜となり空をも飛んだのだそうです。

妙見様が平井にお遷りになったのは今から1300年以上も昔。その頃の妙見沢は鬱蒼とした木立の中にあり深い淵もあったそうです。種陀はその淵を棲家にしていました。ところが時と共に沢が小さくなり、種陀には窮屈になってきました。最初は体を小さく変身させていたのですが、それでも手狭となり、ヘビがカメから離れヤマカガシとなり、カメは甲こうら羅を脱いでサンショウウオに。甲羅はサワガニとなり別れて暮らす事になったのだそうです。しかし妙見様が呼ぶと、それぞれが集まり大きな種陀の姿に戻り、妙見様のご用を勤めたと伝えられています。

そんな事から、かつては「玄武ヶ淵」と呼ばれていた場所もありました。今では流れも細く浅くなり、サンショウウオもサワガニもあまり姿を見せなくなってしまった妙見沢。しかしよく見てみると、深い淵を想わせる雰囲気が残っています。

毎年5月3日には、妙見山の頂に鎮座する妙見宮で、恒例の妙見まつりが行われます。まつりでは優雅な韓国舞踊の披露や、農楽隊の町内巡行が行われます。



妙見様を祀った妙見宮

アクセス

妙見宮へは「尾崎」バス停下車、徒歩7分です。
平井川北の通りを西へ向かい、東光院境内奥の山頂になります。



日の出WALK(観光マップ)【M-7】

